基礎研レポート

晩年に関する不安

～老後とその先の不安には「近居」が“程よい距離感”

保険研究部 主任研究員　村松 容子
e-mail: yoko@nli-research.co.jp

近年、親世帯と子世帯が程よい距離感を保ちつつ、いざという時にはお互いに行き来することができる「近居」が増えている[1]。共働きをする子育て世帯や、加齢による体力低下、心身の不調に不安を抱える高齢者世帯でメリットがあるとされる。

加齢にともなって生じる問題としては、病気になることや要介護状態になること以外に、家やお墓をどう守っていきたいか、お葬式はどのようにしてほしいかといった死後に関する諸課題もあり、晩年には、こういった不安を抱えている人もいると思われる。

そこで、本稿では、死後に関する諸課題も含めた晩年に関する不安の度合いが、子の同居等状況によって違うのか分析を行った。使用したデータは、ニッセイ基礎研究所が 2023 年 6 月に実施した「生活に関する調査[2]」である。本稿では、前半で、対象者全体の概要をみたあと、後半では、65 歳以上の男女 514 人（男性 254 人、女性 260 人）に絞って、65 歳以上の不安について分析を行う。

1――晩年に関する不安

1｜不安の全体像

晩年に関する 9 つの不安[3]について、不安の度合いを「不安である/やや不安である/どちらともいえない/あまり不安でない/不安でない/該当しない」の 6 段階で尋ね、それぞれの不安について「不安である」と「やや不安である」を合計した割合を図表 1 に示す。

9 つの不安の中では、「自分の介護で家族に負担をかける」が全体で 45.6%ともっとも高く、次い

1　千年よしみ「近年における世代間居住関係の変化」国立社会保障・人口問題研究所、人口問題研究（2013 年）

2　ニッセイ基礎研究所「生活に関する調査」学生を除く全国に住む 20～74 歳の男女を対象とするインターネット調査。実施時期は 2023 年 6 月、有効回答 2,583（男性 1,288、女性 1,295）。

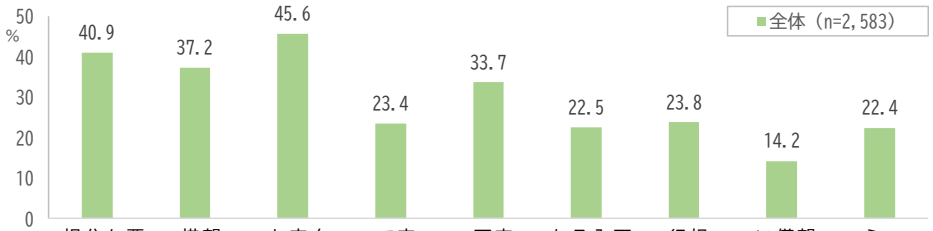
3　9 つの不安とは、「要介護状態になったとき自分の尊厳が無視される」「望まない延命措置を受ける」「自分の介護で家族に負担をかける」「家族に介護してもらえない」「家族を遺して死亡する」「死後に自分の入るお墓を守る人がいなくなる」「相続が円滑に行われない」「望むような葬儀が行われない」「「家」が途絶えてしまう」（図表 1 参照）。

｜Copyright ©2024 NLI Research Institute All rights reserved

で「要介護状態になったとき自分の尊厳が無視される（40.9%）」、「望まない延命措置を受ける（37.2%）」「家族を遺して死亡する（33.7%）」が続いた。自分の死後に関する不安としては、「相続が円滑に行われない」「死後に自分の入るお墓を守る人がいなくなる」と「「家」が途絶えてしまう」が全体で2割強となっていた。

年齢や家族構成別にみると、「要介護状態になったときの自分の尊厳が無視される」「自分の介護で家族に負担をかける」は、高年齢で不安に感じる度合いが強く、自分が要介護状態になった場合に関しては、介護される自分の負担に対しても、介護する家族の負担に対しても不安が強いようだった。一方、「「家族に介護してもらえない」「相続が円滑に行われない」「望むような葬儀が行われない」は、高年齢で不安に感じる度合いが低くなっていた。高年齢では、年齢や経験を重ねていく中で、将来を具体的に思い描けるようになり、晩年に関する不安についても軽減していくものがあるのかもしれない。「死後に自分の入るお墓を守る人がいなくなる」「望むような葬儀が行われない」「「家」が途絶えてしまう」は20歳代と未婚で特に高かった。20歳代などの若年では、親も存命である人が多いと考えられることから、自分の死後の諸問題については、遠い先のことだろう。独身である人も多く、晩年に自分がどういった家族とどのように暮らしているのか想像もつきにくいながらも、若い時代や独身時代には気がかりの1つのようだ。なお、「家族を遺して死亡する」と「望まない延命措置を受ける」に対する不安は年齢による明らかな傾向は見られなかった。

図表1　不安計（不安である＋やや不安である）



	n	要介護状態になったとき自分の尊厳が無視される	望まない延命措置を受ける	自分の介護で家族に負担をかける	家族に介護してもらえない	家族を遺して死亡する	死後に自分の入るお墓を守る人がいなくなる	相続が円滑に行われない	望むような葬儀が行われない	「家」が途絶えてしまう
全体	2,583	40.9	37.2	45.6	23.4	33.7	22.5	23.8	14.2	22.4
男性	1,288	34.2−	32.3−	40.2−	23.4	31.3−	25.5＋	22.4	16.8＋	27.2＋
女性	1,295	47.6＋	42.2＋	51.0＋	23.3	36.1＋	19.5−	25.2	11.7−	17.7−
29歳以下	306	33.3−	39.2	35.0−	28.4＋	37.6	28.1＋	34.0＋	24.8＋	29.4＋
30～44歳	640	36.7−	34.4	39.1−	24.2	34.2	20.5	26.6	18.4＋	23.9
45～59歳以下	808	41.3	37.4	48.8＋	25.0	34.5	23.3	23.4	13.4	20.8
60～74歳以下	829	46.6＋	38.6	51.6＋	19.3−	31.1	21.1	18.2−	8.0−	20.3
未婚	829	38.4	37.0	33.3−	25.6	27.7−	26.2＋	23.9	17.5＋	28.6＋
既婚（配偶者あり）	1,511	42.1	36.9	51.5＋	22.6	38.2＋	20.7−	24.6	12.7−	19.7−
既婚（離別）	193	41.5	38.9	52.3	23.8	25.4−	21.2	18.1	13.0	16.6−
既婚（死別）	50	46.0	44.0	48.0	10.0−	30.0	18.0	20.0	12.0	26.0
子どもなし	1,225	38.4−	36.7	36.6−	25.7＋	29.1−	26.2＋	23.1	15.9＋	25.8＋
子どもあり	1,358	43.2＋	37.8	53.8＋	21.3−	37.8＋	19.1−	24.4	12.7−	19.4−

（注）全体と比べて差のある数値に±（5%有意水準）
（資料）ニッセイ基礎研究所「生活に関する調査」2023年6月

 Copyright ©2024 NLI Research Institute All rights reserved

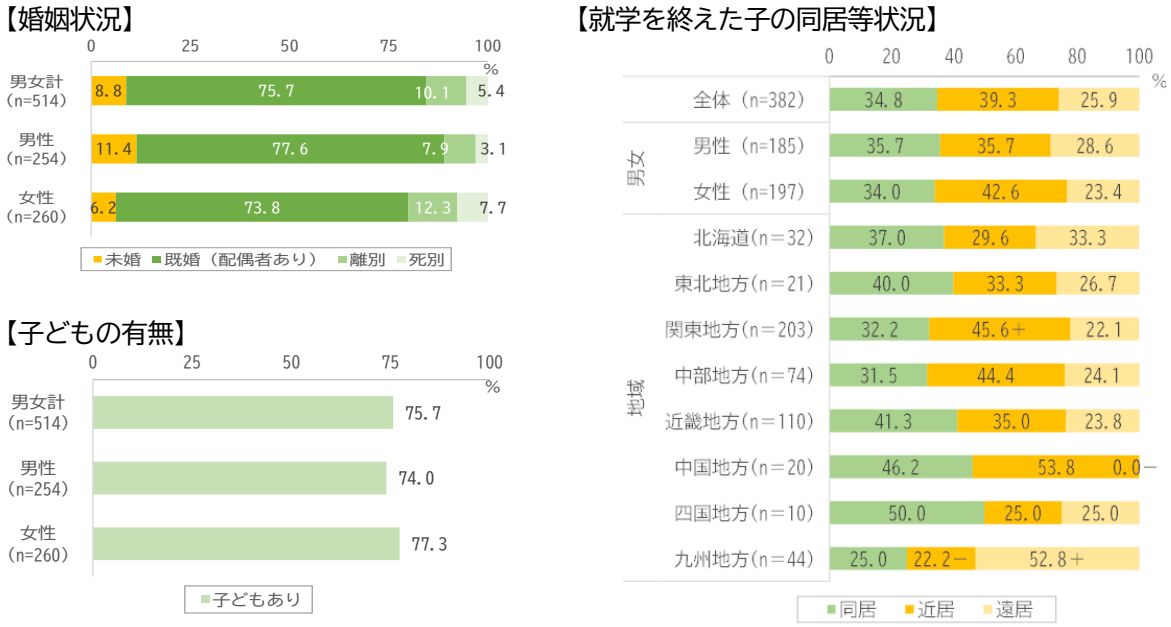
子どもの有無別にみると、「自分の介護で家族に負担をかける」は子どもがいる場合に、「家族に介護してもらえない」「死後に自分の入るお墓を守る人がいなくなる」「望むような葬儀が行われない」「「家」が途絶えてしまう」は子どもがいない場合に高かった。それぞれ、子どもがいる・いないならではの不安だろう。こういった家の存続等に関する不安は、男女を比較すると男性で高く、家の存続に関して、男性への期待が大きいと考えられた。

以下では、65 歳以上に分析対象を絞って、家庭の状況と不安についてみていく。

2｜65 歳以上の家族の状況、子どもの同居等状況、考え方

今回、分析対象とする 65 歳以上の家庭環境などはどうなっているだろうか。65 歳以上の婚姻状況や子どもの有無、子どもとの同居等状況、価値観を図表 2 に示す。全体の 8.8%が未婚、75.7%が既婚（配偶者あり）、10.1%が離別、5.4%が死別していた。全体の 75.7%に子どもがいた。また、全体の 74.3%（382 人）に就学を終えた子どもが、3.1%に未就学～就学中の子どもがいた（図表略）。

図表 2　65 歳以上の家族構成等、および価値観等



（注 1）就学を終えた子が複数いる場合は、そのうち最も近くに住んでいる子の状況について回答してもらっている
（注 2）全体と比べて差のある数値に±（5%有意水準）
（資料）ニッセイ基礎研究所「生活に関する調査」2023 年 6 月

就学を終えた子がいる 382 人について、同居する就学を終えた子がいる割合が 34.8%、同居する子はおらず、日常的に行き来できる範囲に住んでいる就学を終えた子がいる（以下「近居」とする。）割合が 39.3%、同居と近居はおらず、離れたところに住んでいて日常的な行き来は難しい就学を終えた子がいる（以下、「遠居」とする。）割合が 25.9%だった。サンプルサイズが小さいもの

 Copyright ©2024 NLI Research Institute All rights reserved

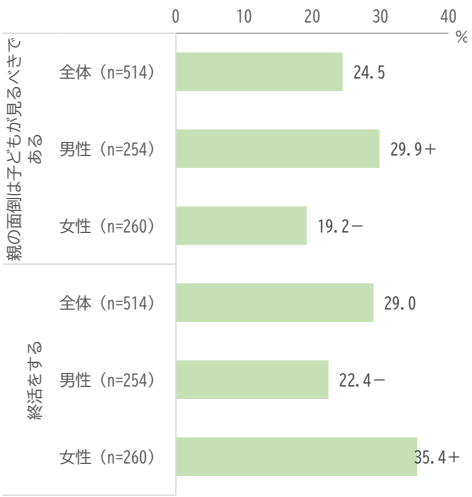
の、地域別にみると、関東地方で「近居」が多い等地域による差がある可能性があった。

就学を終えた子の同居等状況別に、対象者の年齢をみると、同居は 68.3 歳、近居は 69.6 歳、遠居は 68.9 歳だった。

晩年に関する不安に影響があると考えられる「親の面倒は子どもが見るべきである」といった価値観を持つかどうかをみると、「親の面倒は子どもが見るべきである」は、男性が 29.9%と、女性を 10 ポイント以上上回った。

また、こういった不安に対して、自分自身の考え方を整理したり、家族・親族等に伝える準備として「終活[4]」を行っているかどうかをみると、「終活」は、女性で 35.4%と、男性を 10 ポイント以上上回った。

図表 3【「親の面倒は子どもがみるべき」と思う割合】【「終活をしている」割合】



（注）全体と比べて差のある数値に±（5%有意水準）
（資料）ニッセイ基礎研究所「生活に関する調査」2023 年 6 月

3｜65 歳以上の晩年に関する不安

子どもの同居等状況や、価値観、終活をすることと、9 つの項目に対する不安度合いの関係をみるために、不安度合い[5]（5～1 点）を被説明変数とし、性、年齢、未既婚、就学を終えた子どもの同居等状況、「親の面倒は子どもが見るべきである（5～1 点）」という考え方、「終活をしている（ダミー）」を説明変数として、重回帰分析を行った。経済的ゆとり（5～1 点）、時間的ゆとり（5～1 点）、主観的健康感（4～1 点）は調整変数として投入した。推計結果を図表 4 に示す。

子どもの同居等状況についてみると、就学を終えた子がいない場合に比べて遠居と近居で「家族に介護してもらえない」「相続が円滑に行われない」「望むような葬儀が行われない」の不安が、近居ではそれに加えて「死後に自分の入るお墓を守る人がいなくなる」「「家」が途絶えてしまう」の不安がマイナスになっていた。子どもがいることで、介護をしてもらえる可能性があるほか、相続や葬儀について、自分の希望を伝えることができるため、不安が軽減している可能性が考えられる。遠居と近居の違いとして、近居は、「死後に自分の入るお墓を守る人がいなくなる」不安と「「家」が途絶えてしまう」の不安が軽減されている可能性があった。遠居では、親の家にはもう戻ってこない可能性が考えられる中で、近居の場合は、普段からの交流が活発であることが想像でき、「家」やお墓についての親の考えを遠居より伝えている可能性がある。

同居は、「自分の介護で家族に負担をかける」がプラスとなっていた。子が同居している場合、親が要介護状態になると同居する子の負担が増える可能性が高く、それが親の大きな不安になってい

[4] 調査票では、「終活」には「よりよい最期を迎えるため、または遺された家族への負担を減らすための準備」という説明を付けた。

[5] アンケートでは 6 段階で尋ねているが、回帰分析では、不安である／やや不安である ／どちらともいえない・該当しない/あまり不安でない/不安でない、の 5 段階に集約した。

 Copyright ©2024 NLI Research Institute All rights reserved

る。同居は近居と比べてさらに日常から親の考えをわかっていやすいと思われるが、今回のデータでは、同居の場合はそういった不安軽減の様子は見られなかった。同居をしている中には、子どもが未婚であったり、子どもの収入が安定していない等の背景をもつ可能性があるため、親の負担軽減より子の負担増加の影響が大きく影響している可能性がある。また、同居している子が未婚である場合は、将来的に結婚等で家を出る可能性があることから、同居によって不安が減る人ばかりではない可能性が考えられた。

図表４　９つの不安項目　推計結果

		要介護状態になったとき自分の尊厳が無視される	望まない延命措置を受ける	自分の介護で家族に負担をかける	家族に介護してもらえない	家族を遺して死亡する	死後に自分の入るお墓を守る人がいなくなる	相続が円滑に行われない	望むような葬儀が行われない	「家」が途絶えてしまう
女性ダミー		0.3232***	0.2945**	0.1570	0.0631	0.1231	-0.1772	-0.0033	-0.1079	-0.1994
		(0.0934)	(0.0994)	(0.0894)	(0.0887)	(0.1012)	(0.1058)	(0.0925)	(0.0904)	(0.1040)
年齢		-0.0301	-0.0259	0.0119	-0.0334*	-0.0036	-0.0098	-0.0265	-0.0095	-0.0034
		(0.0177)	(0.0179)	(0.0161)	(0.0162)	(0.0178)	(0.0191)	(0.0170)	(0.0164)	(0.0191)
未既婚	未婚	(参照)								
	既婚	-0.1072	0.0160	0.1700	0.3220	0.2771	0.1898	0.2951	0.3172	-0.1464
		(0.2045)	(0.2117)	(0.1836)	(0.1816)	(0.1972)	(0.2421)	(0.1688)	(0.1935)	(0.2152)
	離別	-0.1820	0.0820	0.0156	0.2616	-0.2075	-0.1268	0.3272	0.1844	-0.3178
		(0.2430)	(0.2345)	(0.2178)	(0.2330)	(0.2215)	(0.2806)	(0.1967)	(0.2245)	(0.2620)
	死別	-0.0316	0.0957	0.2200	0.0155	0.0719	0.1971	0.5551*	0.3705	-0.0006
		(0.2622)	(0.2823)	(0.2301)	(0.2435)	(0.2808)	(0.3130)	(0.2419)	(0.2481)	(0.2928)
同居等の状況	就学後の子（いない）	(参照)								
	就学後の子（遠居）	-0.2345	-0.2432	0.1099	-0.2854*	-0.2930	-0.3067	-0.4739***	-0.3367*	-0.2075
		(0.1506)	(0.1580)	(0.1537)	(0.1431)	(0.1686)	(0.1631)	(0.1355)	(0.1400)	(0.1552)
	就学後の子（近居）	-0.1029	0.0462	0.2190	-0.3457*	-0.2047	-0.4388**	-0.3694**	-0.3234*	-0.4453**
		(0.1343)	(0.1403)	(0.1418)	(0.1377)	(0.1625)	(0.1559)	(0.1353)	(0.1336)	(0.1516)
	就学後の子（同居）	-0.0280	-0.1920	0.4643***	-0.1422	0.2217	-0.1377	-0.1447	-0.2017	0.0299
		(0.1354)	(0.1417)	(0.1362)	(0.1297)	(0.1591)	(0.1516)	(0.1340)	(0.1301)	(0.1517)
親の面倒は子どもが見るべきである		0.0325	0.0452	0.0495	0.2029***	0.0388	0.1689**	0.1144*	0.1184*	0.2727***
		(0.0515)	(0.0546)	(0.0517)	(0.0544)	(0.0575)	(0.0587)	(0.0495)	(0.0525)	(0.0588)
終活をする		0.3064**	0.2806*	0.3713***	0.1736	0.0481	0.0280	0.1885	-0.0755	0.1095
		(0.1057)	(0.1118)	(0.0987)	(0.1020)	(0.1133)	(0.1175)	(0.1067)	(0.1010)	(0.1206)
観測数		514	514	514	514	514	514	514	514	514
調整済決定係数		0.110	0.099	0.105	0.104	0.050	0.089	0.053	0.059	0.101

（注１）＊ p<0.05、**p<0.01、***p<0.001
（注２）（　　）内は頑健な標準誤差
（注３）経済的ゆとり、時間的ゆとり、主観的健康感を調整済
（資料）ニッセイ基礎研究所「生活に関する調査」　2023 年６月

親の面倒は子どもが見るべきであるという価値観がある親で「家族に介護してもらえない」「死後に自分の入るお墓を守る人がいなくなる」「相続が円滑に行われない」「望むような葬儀が行われない」「「家」が途絶えてしまう」がプラスになっていた。子どもが面倒をみるべきと考える親では、伝統的な価値観を持ち、家を守ることを大切にする人と考えられる。子に求める期待水準が高い可能

 Copyright ©2024 NLI Research Institute All rights reserved

性があるほか、子どもに頼ってきたことから、自分の準備が進んでいない可能性があり、不安が高いことが考えられる。

「終活」を行っている人では、「要介護状態になったとき自分の尊厳が無視される」「望まない延命措置を受ける」「自分の介護で家族に負担をかける」の不安が高い。終末期に希望する医療等に関して日頃から関心をもっていると考えられる。

2――晩年に関する不安軽減のためにできること

以上のとおり、65 歳以上の晩年に関する不安を、主として、子どもとの同居等状況別に、親の面倒は子が見るべきだという考え方、終活をしているかどうかに着目しながら分析した。

子どもがいない場合と比べて、同居している子がいる場合は、親が要介護状態になったときの家族の負担増加に対する不安が大きく、親の晩年における各種不安において、不安に感じる度合いに軽減は見られなかった。遠居・近居では介護をしてもらえる点や相続が円滑に行われる点、望むような葬儀が行われる点で不安が低くなっており、子どもがいることによって不安が軽減されている可能性があった。さらに近居では家やお墓を守る点でも不安が軽減されていた。親にとって、「近居」が晩年に関する不安軽減の面では程よい距離感と言えそうだ。

子が遠居である場合、家やお墓についての考えを子どもと積極的に共有する等の工夫で、晩年における不安を軽減させることができる可能性がある。また、同居である場合は、親が要介護状態になった場合にはどのように対処するか、どういったサービスが利用できそうか、早めに子どもと相談しておくことで、将来的に親も子も不安を軽減できる可能性がある。

家やお墓を守ることは、若い世代でも気がかりである様子がうかがえた。子どもが若い頃から、親の死後の諸課題についての考え方を共有することで、将来的に、親自身も子どもも不安を軽減できる可能性が考えられた。

| Copyright ©2024 NLI Research Institute All rights reserved